

教会暦と聖書の流れ

ミサの朗読には、長い形と短い形がありますが、この「福音のヒント」ではいつも長い形のほうを取り上げています。グループで分かち合う場合には、ミサほど時間の制約がないと思うからです。なおきょうの短い形では、11 節以下の「放蕩息子の父のたとえ」が省略されていますが、それは今年(C 年)の四旬節第 4 主日でも読まれた箇所だからでしょう。ルカ福音書の文脈では、イエスはエルサレムに向かう旅を続けています。その中でイエスは父である神の姿と神の国の喜びをはっきりと示していきます。

福音のヒント

(1) 3つのたとえ話ですが、1-3節の導入部分は大切です。これらのたとえ話は単なる言葉による教えではなく、イエスの生き方・行動と密接に結びついているのです。この話のきっかけは、イエスが徴税人や罪びとを招き、食事まで一緒にしていたのを非難されたことでした。イエスの答えが、「神とは、この羊飼いのような方であり、一枚の銀貨を探す女性のような方(!)であり、放蕩息子の父のような方だ。だから、自分も罪びとを招き、食事を一緒にしているのだ」ということであるのは明白です。

(2) 「共に食事をすること」が、一緒に食事をする人同士の絆を作り、確認し、深めるものであることは、ほとんどすべての民族・文化に共通することです。食べ物を一人占めせずに、分け合って食べるというところに、人と人とのもっとも基本的な「共に生きる姿」があると言えるのでしょうか。ユダヤ人にとって「共に食事をする」ことは「神の前での大宴会」のイメージでもありました。出エジプト記はイスラエルの長老たちがシナイ山で、神を見て食べかつ飲んだことを、特別な恵みのしるしとして伝えています(出エジプト記24章11節)。預言者は最終的に到来する救いの完成を神のもとでの宴として描きました(イザヤ25章6-10節)。

地上で「共に食事をする」ことは、この「神のもとでの宴とそこに集う共同体」を目に見える形で表すものと考えられていました。それゆえ、イエスの時代のユダヤ人は異邦人と一緒に食事をしませんでした。自分たちだけが神の救いの食卓にあずかると考えていたからです。同じように、ファリサイ派の人々は自分たちのグループだけで食事をしました。徴税人など罪人は救いから排除されるはずだったからです。イエスにとっても「共に食事をする」ことは救いの共同体を表すものでした。しかし、だからこそイエスはすべての人をそこに招いたのです!

きょうのたとえ話は、神が罪びとの滅びではなく、罪びとが生きることを望んでおられ



るということを明確に示しています。神は罪によって自分から離れ、ボロボロになり、滅びかけようとしている人を、探し、待ち続け、見つけて連れ戻すことを喜びとする方なのです。

(3) 福音書の中での「罪びと」の問題は、自分の意志で悪を行ったというようなことよりも、病気や職業によって罪びとのレッテルを貼られ、神からも人からも断ち切られていた人々の問題だったということを思い出すことも、たぶん大切でしょう。それは「悪いと知りつつあえてその悪いことをするというような厳密な罪」というよりも、もっと広く「神と人々から断ち切られた状態」の問題だといってもよいでしょう。今の社会の中ではどういう人々のことを思い浮かべることができるでしょうか。

(4) きょう、わたしたちはこの福音をどう受け止め、どのように分かち合うことができるでしょうか。たぶんまず最初に問われることは、わたしたちがだれの立場でこれらのたとえ話を聞くかということです。「迷わずにいる99匹の羊」か「迷った1匹」か。真面目に父親のもとで働いてきた兄か、放蕩息子である弟か。もし后者であれば、きょうの箇所のとえ話は、もうありがたくてありがたくて仕方ない「福音」としか言いようがないでしょう。ただし、イエスはこれらのたとえ話を、迷子の羊や放蕩息子である「徴税人や罪びと」に向けて語られたのではありません。むしろ99匹であり、真面目な兄である「ファリサイ派や律法学者」に向けて語られたのです。そこで求められていることははっきりしています。99匹には、羊飼いの心を分かってほしい、兄には、弟を受け入れた父の心を分かってほしい、ということです。これも、わたしたちにも思い当たることのあるのではないのでしょうか。自分を「99匹・兄」と感じる部分がだれの中にもあるでしょう。一方、「迷子の1匹・弟息子」と感じることもきっとあるでしょう。わたしたちはどんなときにそう感じるのでしょうか。

「わたしにとって、迷子の1匹や弟とはだれのことか」と問いかけてみることもできるかもしれません(マタイ18章10節)。本当は神がとても大切にしている人なのに、自分がいつの間にか見下していたり、無視してしまっている人がいるのではないのでしょうか。

(5) 放蕩息子のたとえで、よく言われることは「こんなに甘い父親では、弟は更生しないし、兄もやる気を失ってしまう」ということです。社会の常識から言えばそのとおりでしょう。それでも神は、無条件にゆるすのです。なぜなら、人間は神からの、この無条件のゆるしと愛なしには生きられないものだからです。そのことを本当に感じられますか。

放蕩息子の父のたとえは、ゆるしとは関係回復の出来事だということを非常にはっきりと示しています。弟息子は「わたしが頂くことになっている財産の分け前」と言いますが、これは普通なら父親が死んでから与えられるものです。弟息子にとって父は死んだも同然、まったく関係を断ち切ってしまいます。一方の父親は息子の帰りを待ち続け、帰ってきた息子を「見つけて、憐れに思い(例の「スプランクニゾマイ splanknizomai = はらわたして!」)、走り寄って」、わが子として受け入れるのです。ゆるしとは罪によって断ち切られた関係を取り戻そうとする働きです。この関係回復も現代世界の大きなテーマではないでしょうか。